



^ 5
6606
2



入5
6606
2



学部図書に移管48年6月8日

60439

<2000-298>



梅室大人附句技萃下卷

勢南 菊所 編輯

混雑の部

白落の味端を喰わくあさまり
耳のまきさき一寺の持きす
風をさくすさるふ橋乃らん
世軍の志ふらさ夏ふ成ふる
世実をたかり猪ふまを急う
猪とて思ふふととて 冥縁 縁



欽明帝の時
蘇我大臣向原
家ヲ喜捨メ
寺トス是寺也
始ナリ其址大
和古市ニアリ

洛西

千葉之助常胤
保元平治比久
坂東平氏内
能役者大和
春日社四座
外山室結崎
坂戸金田田漢
暮

前見

蜚虫

羽子胡鬼子ト
呼ハ形状似タル故
ナリ胡鬼子和名
ツク子ト云世諺
向答ニコキノコハ
蜻蛉ニカネトリテ
ムクロジヲ首ト羽
ツクル板エテツキ上
レハ落サマニホウ
カリヲチヌ蜻蛉
救ヲトリ食フ故ニ
稚兒蚊ニテハレヌ
マシテヒトスルナリ

ふるふの法交乃今之廢まは
りたもの難ひとゆる頂つこ
けられしおぼも善法をいむん
極よせよと思を 勢ウチこつこ
るまやせしむ 聖乃 経ひ
る中しおぼもを人よ美しし
る感とつしうらひをのまを合て
るの佛れよなつ 弁ウチり

東耕

味りしき向し 門を建
極のこしを 時をあり

耕

柳子よきききき 蚊のむ
き極よききき あれハき
きききききききき 乃下流
ききききききききき 板
まげのうらひのちるきき
小花といききき 男出のり

碁論語博弁
アリテ童子春秋
アリ

草解

文草初属大山
疾仕後出俗
蕉門騷客多
寐ヨロ草ハ即
文草所著也
希名
除夜則燈ヲ點
ズハ照應耗ノ風
俗ニテ則鬼ヲ穢
スシキ為ナリ

黒菜

前見

まゆらちのぬきちりもきりぬつて
萩とつちのふさもやさはく

やまゆり味のつきーやき

文草も福もろひまふきりひん

廁の灯それよき夜のいつあき

栗ふ本のゆらあつて

恙初布の味もめつて

少依よりちあくとあむ親茶

あつて人の料理もてく物も

まらう路やあきの冬川橋を

きりもあも月一枯り

穀海の沖よあつてきんた

きりあきよぬり杖も

うらひをぬきとあぬる小侍

根垣の葉屋の心もあぬる

前見

武州品川太森
間地名

内裏公家門下
衆所ノ荷ヒ茶
賣ヲ捨テ担茶
屋ト云

下

三

漢

骨董羹

古事於牝牛
乘車用雜支
役力カク故ニ雜
役牛ト云今ハ
馬ニシテ雜役
呼

浪花
扁額

信濃

神主六書紀三天
田根子為祭主
即見テリ祭主ハ
即神主ナリ又
神功皇后親為
神主後祠官通
稱ヨリ唐主ハ
禹為山川神主
ト夏本紀ニ見ユ

葎草

京極黃門定家
卿筆跡一流

いそぎ草の湯引くさる月影の
移り流るる弾乃あつらふ

松原の少孫らの世もきこゆる
美なるさるを初す一舌

房の志とく軽役乃鞆
栗折を小侈な飽ん親のえ

津村の紫の親は旅さく
くつさるるきこふあ繁のあそ

後ろをさや吾列へんあそ
おろをさすていさく心炯為

本筋をさるる後乃非を
かちをさるる約押てたり山年貢

櫻葉をさるるを流りたる
作らるるるきこ乃あ

檜の上平しきるる後葉子
百世のさるるさるるあゆ

宗祇姓三善号
種玉庵又自然
斎紀州人
弥陀翻ノ無
量壽佛去
鈔起リ麴口
半片ナリト云

前見

堀兼井武州
入間郡ニアリ

温牡丹

肖栢連歌長
池田ニ徳居ス社

丹佳句不有
牡丹花老入新
常ニ牛ニノリ吟
行ス

柵

鹿笛鹿皮或
蝦蟆皮ヲ用テ
簧ト作ス上徒然
草ニ入ルヤシク
ニテ造ル笛ニ秋
鹿カラスヨルトソ
ヨロヒ未出

書紀景武尊
東夷ヲ平シ
甲斐國酒打堂
居士進食時ニ
歌ヲ以テ唱フ
摩利花以波馬
頭擬氏異音加
新流兼備着
歌ヲ讀テ白依鐵

素下のるれそふし初あし
宗祇乃御をとめる海の

日よそなある弥陀堂乃征
其ゆをと海屋の中よ坂一
車ノ最しきもちゆりそ
うろくと響ひ交す梓色也
山

燒茶を佛の縁よそりし
流泉うしすあまうの乃水

その牡丹は茶えつけ
時あり汁まよ牛と

月影は美度松乃まよる
あう下まよるあま

いそよふしはゆりし
漢意をあたし汁まよる

振ハちる今焚茶乃新茶
候を香くうける口上

連ふをしめる候乃えま

奈倍氏用環
鹿鹿能比耳
狹苦鳩伽場釋
日本紀以連歌
ノ温筋大

前見

笛ノ名神代紀
一書本國主人
伊并冊尊ヲ祭
ル条ニ出タリ

藥ヲ服セザルハ
中醫ヲ得ズ
漢班固云リ
此句暗用也

京愛宕推現
勝軍地蔵騎
馬ノ像甲冑
弓箭ヲ帶ス

謡曲國栖ニ孫
毛有彦モアリ
谷ノ峯ニヨリ
出合云々

師ヲ能化トシ
弟子ヲ所化ス
薄サ菜

おそろく〜とあぢ〜向〜る 古冊

風車まゝの 角カやと〜 平

寿の方けらうらま〜 平

呼きせむの ねくあ〜むえ 平

松指筆のひ〜ま〜ま〜ち

這汁は初夜あけ乃月さ〜

医者のあ〜ま〜の〜ぬ〜あ

ぼむ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

大押降備〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ 鹿嶋

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

下

六

前見
浪花街名

周語陽伏而
不能出陰迫而
不能蒸於是
有地震

越前氣比社
仲哀天皇鎮座

前見

江戸街名

美濃

近江

秋風よひくも^{フキ} 壓^キく 萩^{カキ}二軒^{キリ}
若うこうせハ ちるる 悔^{キリ}

新^キの字^シ宮^{ミヤ}森^ノなるぬ月^{ツキ}あるハ
吾^ガか^カり^リ花^ハの^ノ表^ハ所^ト

あ^アら^ラ海^{ウミ}を^ヲ 米^{コメ}た^タつ^ツる^ル夢^{ユメ}
交^マり^リの^ノ地^チを^ヲ 舟^{フネ}の^ノ中^{ナカ}で^デ ち^チり^リたり^リ

氣^キ比^ヒの^ノま^マを^ヲ 吹^{フク}く^クる^ルも^モ ち^チり^リたり^リ
時^{トキ}の^ノま^マを^ヲ 吹^{フク}く^クる^ルも^モ ち^チり^リたり^リ

船^{フネ}の^ノま^マを^ヲ 吹^{フク}く^クる^ルも^モ ち^チり^リたり^リ
船^{フネ}の^ノま^マを^ヲ 吹^{フク}く^クる^ルも^モ ち^チり^リたり^リ

子^コニ^ニ人^トを^ヲ 世^ヨを^ヲ ち^チり^リたり^リ
子^コニ^ニ人^トを^ヲ 世^ヨを^ヲ ち^チり^リたり^リ

路^チを^ヲ 見^ミる^ルも^モ ち^チり^リたり^リ
路^チを^ヲ 見^ミる^ルも^モ ち^チり^リたり^リ

ち^チり^リたり^リの^ノま^マを^ヲ 吹^{フク}く^クる^ルも^モ ち^チり^リたり^リ
ち^チり^リたり^リの^ノま^マを^ヲ 吹^{フク}く^クる^ルも^モ ち^チり^リたり^リ

千部ハ法華
十部ヲ傳讀

前見

伏見淀川舟
ヲ三十石ト云

舟の牡丹のさんくふなる
本堂のあふのけり登風
二人てや門と送る群と
おのけり路帯かくもす又送

うちあふく月の河法寺の
急うぬ旅をりそくせき

ふ千石のふれ秋
路のさるけりふりさるふる

をさしと鶴鳴を解き
濃のまをけりをりる新

ふさささささささささ

傳きささささささささ

えびささささささささ

伝きささささささささ

門をささささささささ

やうくと伝きささささ

砧字書三傳
衣石ナリ古歌
多クハ衣ウツ
アリキスタ打
云ハ二見之
元政孝僧深
草瑞光寺淵
山詩歌云
精進ハ無雜
故三精云無間
ノ故二進上云
搏シテ齋戒
不肉食ノ
テレリ

茶梅

三代實録
和年中藤原

貞敏入唐琵琶

秘曲ヲ劉三郎ニ

傳ハレ此樂器

吾國ニ入ノ始

連歌ニツノ緒

歌ニハコトナリ

角^カ抵^マ戯^キ
相撲漢

角力垂仁ノ

朝當縣殿速

野見宿禰ニ

ヲ召テ力ヲ解

シルヲ始トス

上戸和字
本字大戸

山崎の茶梅の咲ぬらうらうらう花の
花の影 浮きあがり 寒 ぬ ぬ

海のはたきのけうらうらうさうらう

とあはれハハ人々さうらうらうらう

さうらうらうさうらうわたり白此花

代たうらうのさうらうらうれー秋

角力よのさうらうらうらうらうらう

あふ 酔 多のさうらうらうらうらう

大ののあはれさうらうらうらうらう

さうらうらうを撲ハ割木 持あがる

膝^子さうらうらうらうらう 勢あがり山崎

ふささく 逆あはれさうらう 勢あがり

なまの 脚り足せさうらうらうらう

茶上戸をあらうらうらうらう

浪喚きさうらうのらうらう。初さうら

あうらうらうらう 朱乃 捲ちん

袈裟不色下
譯天正色非ル
義後色彰稱
也ト云リ

前見

促織

應神紀武内
宿祢甘美納
宿祢文採湯
ノ夏ヲ載又湯
立ハ是ヲ始ト
スルナルハミ

大坂玉造御番

沙彌戒臘ヲ
積テ和尚ト
ナルナリ

若くはとらふまゝにたゞり
方くく巨^{ソナミ}侵の咄ちくく
路色深ハせやく福むるも
如湯生を隔川く色井
門^シ平^ク存^クい^ク飛^ク
福を印より血海焼ひり外さ
福のゆゑりり乳く場のは
急焼おろく眠るるるる

月^ノ情^ヲつ^クま^シ控^ルる^ル
そそ^クま^シぬ^クこ^トう^ク玉^ノ生^ス
う^ウら^シも^ハ花^ノあ^はれ^キま^シり^シ
花^ハの^ふら^しも^ハ陸^ノ奥^ノ東^ノ
つ^クま^シの^あは^れま^シり^シ
逐^マり^シ命^ヲを^受け^ルる^ル
牛^ノあ^はれ^キま^シり^シ方^ノ茶^ノ
あ^はれ^キま^シり^シ川^ノあ^はれ^キ
終^ルる^ルあ^はれ^キま^シり^シ

下

十

並別枚洛東三十三間堂慶長年間淺岡某ヨリ始ル

漢名木詳

去来肥前産後居于洛西号落抄舍向井平次郎八俗称ナリ

建仁寺龍山禪師入元暉朝時林和靖未裔採津因師隨之來リ

南都三住三監瀬氏ナリ饅頭ヲ造ルヲ業トス是吾邦饅頭ノ始

漢名菖蒲五月斬シテハ泥菖ナリ

鼓子花

名三種類ア江湖産スル漢名鱧魚俗名ヲト云海中産スル之ニタナコト云漢名海卿

振津

矢野のちしほのこころをこぼする

あはれむきやと推し一押こむ

あはれむきやと推し一押こむ

海にささぎを^{カキ}と判りあか

連をたせしむるはたす

あはれむきやと推し一押こむ

あはれむきやと推し一押こむ

あはれむきやと推し一押こむ

あはれむきやと推し一押こむ

あはれむきやと推し一押こむ

あはれむきやと推し一押こむ

あはれむきやと推し一押こむ

あはれむきやと推し一押こむ

あはれむきやと推し一押こむ

あはれむきやと推し一押こむ

あはれむきやと推し一押こむ

あはれむきやと推し一押こむ

下

十一

岡見大晦日夜
萬々岡三登り
笠ヲ倒ニ着テ
我家ヲ望見ス六
明年ノ吉凶知ラ
トナリ
文珠此妙吉
祥ト云手ニ利
劍ヲ持ス

告天

伊勢山田六鐘
ナシ光明寺ハ
豊天閣許シモ
アリテ禁セズ世
一ツ鐘ト云
後深草帝時
常盤井實氏
入道寄附ナ
トソ

今川義元桶
狭間敗戦

凱陣も色く水船のちき掃除
海をよしく心く帯う餅さる

汗のやうなる風かろひなり
とくくあんとあぬ甲斐のあま

栗の穢獲く燃しく密しうり
之珠のぬれ花も拂つて

なハ花くこれとそく貴く
さるくく廣くさみの流る

戸のまそのひし柳はうき
今もく流るかの一つのみ

初めくくくくあれあ
控柄の華めあうくく

あをさるれし裡あれあ
さるあああ本の柳あれえ

とりくく今川政の御候
あつまはくくそ轉くあ

豇豆

カシカヤ漢名
未詳萬葉ニ
見エテハ刈各草
コナリ種カ
カト云草ヲ雀
麥也ト云ハ不當

長ノ坂洛西廣
澤ノ上高岡雄ノ
越ル路

乞食又花子
化子正云

アガタハカガリタ
ニテ高田ヲ云中
古ニ至リ官人ノ
已カ任國ヲサシテ
縣ト云ヨリ轉
テ今ハ田舎縣
邑ニ呼リ

前見

美濃のまのまのれ今もあつた
梅屋の一歩一ツをえ 梅屋

そまのまの枝あんなのく 梅屋の
戸張のまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまの
蒸氣のまのまのまのまのまの

月々まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの

長ノ坂のまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの

梅屋のまのまのまのまのまの
うのまのまのまのまのまのまの

かまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまの

美濃のまのまのまのまのまの
あまのまのまのまのまのまの

山城

淀祭九月廿三
西日祭神淀姫

青花魚

内則八十杖朝
ユルシク多クナリ
此句換アリ

百年又とく命をたしりかり
さよとほりよと山ありと雲も
少ふのことく牛の乳干
百歳の徳をぬきよ新あけ
さよみの敷よ果てくる淀祭
結のあけよ果てきたるとけ
たつ一ふるよほりよとくき
さよとれてよと枝をつくとけ

ホシキ本訓
アカカニ漢名
王母珠

洛西

たつ鳥のふり入るも社を
たつるよせとる徳のそひく
さあふくよとる力をとるし
ほりあきよとる志とぬ海巻
堀の糸印く柳らとるなり
路中よとく免灯巻よ新あけ
さよとるよせとる場をよとる押出
海の屋よとる仙とる高あ

漢名未詳

我々ひもわらうる夢をとらわれ
衣のぬるるはのる 海 壺
瓶のぬるる人なりおとさ
賽のぬるるを招きを撰出
つるをひまをを 鑑ニイラのまきけ
くをひまをを 志をひまを
海ハふむはと 君なりおとさ
ちをひまをを 志をひまを

箕竈ノ始ハ
書紀素戔嗚
尊結東青鞨
以為立立衰而
乞宿於衆神
トテリ

能登氣多社
祭神大貴命
又天活玉命云
鶉祭十月
鳥鬼

海をひまをを 志をひまを
海ハふむはと 君なりおとさ
ちをひまをを 志をひまを
月の時を又をぬ 括出
袷のぬるるはのる 海 壺
瓶のぬるる人なりおとさ
賽のぬるるを招きを撰出
つるをひまをを 志をひまを
海ハふむはと 君なりおとさ
ちをひまをを 志をひまを

山城國相模郡
今ノ木津

未出

野坡越前人
江戸及浪花ニ
住スヲ樗木社

扇フウガナリ
摺扇スリハ此邦
製セテ漢コニ
團扇ダンナリ

大松オオマツノ樺カハニありしシくクわつワツるル鐘カネ

拵カサネノ新ニヤウハニニ成ナリるルこのコノ事コト

ふフのノ様サマもモ後ノチ忌ミるル事コト

このコノ時トキもモおおもものノ里サトもモよよのノにニ

一ヒト筋マシのノ若ニヤウふフぬヌきキ乃ナラばバ樗カハ多タくク

陰カゲのノ志シもモ一ヒトとトもモらラるル事コト也ナリ

そソのノ時トキにニはハ樗カハノノ枝エをヲはハきキつツくク

はハきキつツくクのノ音ネをヲきキきキつツくク

あアまマのノ月ツキのノ光ヒカリをヲみミつツくク

あアまマのノ人ヒトもモあアまマのノ徳トク

とトもモあアまマのノとトもモあアまマのノ牛ウシのノ角ツノ

はハきキつツくクのノ時トキもモあアまマのノ事コト

はハきキつツくクのノ音ネをヲきキきキつツくク

あアまマのノ時トキもモあアまマのノ事コト

あアまマのノ音ネをヲきキきキつツくク

あアまマのノ事コトもモあアまマのノ徳トク

浪人 和字ニア
ラス王勃春思
賦僕本浪全有

三才國會ニテ
讀習チニ非ス

近江

ハウシキハ撃事拵
俗ニテ傳シテ
ヘウシキト云

姫神盛衰記
見エタル奥州
笠島ノ神ヲ云
ニヤ
祝詞神ヲ云
ス詞

上野信濃界

祐庵茶入有
共海堅甲久
北村氏

キリクヒノ復
徒然草中語

浪人 ありきぬ 杖乃 書物り

傍りありきぬ 常言をさし 杖乃 書物り

軍入りきぬ 危れ 牡丹 咲きぬ

姫神のききぬ 入徳 河 傍りのけ

るのやきぬ 流しきぬ 海代

柳かきぬ 杖乃 書物り

徳屋のきぬ 杖乃 書物り

川きぬ 杖乃 書物り

切株の 杖乃 書物り

奈良茶、茶ニ
テ蒸セリ飯ナリ

石笔

前見
鹿梨
哨船

近江生島四
十九院アリ又

高宮ト愛智
川ノ濱ニモ四十九
院ト云ルアリ此
向ニテハ竹生島
ナラン

宇迦之御魂神
稻荷神社

京街名

未出

六角堂浴陽中
心ニテハ文字草創

夏草のつらみもあはれぬ人

か〜〜〜〜結よ飯茶こぼさ

眺〜〜〜〜茶の湯と二玉を

ま風よま士のあ〜〜〜

懐心乃上を小いなり

戸よたて〜〜〜〜〜
ありの交をな〜〜〜〜
猶テンあれあうよ〜〜〜〜
曰十九院神あり伴せう〜

梅のつらみとあ〜〜〜〜
机のつらみの風よ〜〜〜

路〜〜〜〜〜
中あすの灯と並〜〜〜

多〜〜〜〜〜
秋のつらみも〜〜〜

籠のつらみも〜〜〜
湯のつらみも〜〜〜

蹴鞠諸書
用明天皇朝
始上有之在唐
代より傳せり
ハシ依上六漢代
ニモ此戲アリト
見エタリ

江戸

漢名未詳

書紀果武尊
賜ヲ着玉ノ下
見エタリ

杉田勾當當望一
伊勢山田住老後
受貞徳翁翁翁
百韻略句覽永
古写本予家ニ
蔵ス

西京

末廣公編撰ノ
一テ又中啓云

落し也人ものうらま同のほは
系押らうくを社平一昇うむ
鞠の使乃日よえくひする
こそくとも自利しきぬ池の端
夕飯も喰ひはる医者の智まゆ一
身よこのけさるえさ乃級
芍薬を尻目な燈をなつてく
財布を落す事おひひしき
喃

さきよとわれし一級乃小人形
をもひてもさ戸の医者をひき
喰あつて移ふ山麓は十の
春家のゆも皆護忌く
一城うる乃つまじく
さくしきさういさうの娘りく
旅あつぬ家とあつて壬生狐
末廣落す事一乃ゆきを

嵐雪服部氏
号雪中菴

七草萬葉集

菘之花

菘之花

菘之花

菘之花

紀伊

前見

鮎大和芳野

川名産

漢名香魚

前見

まじく萩の萩さるゑん 乃 暖
あけくさる 猫も似今ぬあもあて

かきくる 名の海をいりく 吾々へ
まの後の種をよめくくよ干は

あめれとあくる 至後乃七さる 五辰

あめれとあくる 至後乃七さる 五辰
人乃あめれとあくる 至後乃七さる 五辰

まの後の種をよめくくよ干は
あめれとあくる 至後乃七さる 五辰

あめれとあくる 至後乃七さる 五辰
あめれとあくる 至後乃七さる 五辰

あめれとあくる 至後乃七さる 五辰
あめれとあくる 至後乃七さる 五辰

あめれとあくる 至後乃七さる 五辰
あめれとあくる 至後乃七さる 五辰

あめれとあくる 至後乃七さる 五辰
あめれとあくる 至後乃七さる 五辰

あめれとあくる 至後乃七さる 五辰
あめれとあくる 至後乃七さる 五辰

あめれとあくる 至後乃七さる 五辰
あめれとあくる 至後乃七さる 五辰

あめれとあくる 至後乃七さる 五辰
あめれとあくる 至後乃七さる 五辰

近江多賀社
祭神伊弉諾
尊

鴻

毘盧舎那三
大日上云

子キ字を美
日根紀所ヨリ
職云補真即
祈訓本朝
月令云念義
續日本紀二八
浦義作リ

柑

惡人即棄力
句ヲ襲テ作リ

衛矛

背見庵日光
十禪寺ニリ

前見

法華天應ノ
頃日蓮是ヲ松

秋志むひは千一多む笑乃ちと

明とハされくぬる 暮ま客

ち日のほるあも 穠をうちむる

半燈田のまを 漸とりをのせ 空水

顔のをうくも 後を乃 夕續

系ものくまくく 凡くも 秋の風 水

笑流くくも 暮柑あくも

幹葉をうり 年 流くみふく心

小佛の極くく 暮ぬぬ心

所あるとつとく 心あくく 惡を身

をく ほとりる 夕 降 西も

幼美 綴る 心く 秋のさり

と せく 案く 心 冬 櫓 ちく

背 流く あも 佛の なるり 心

秋の 山 心 末 乃 刈 草

深く 心 心 送く 四 條

かう 心 心 心 心 心 心 心 心

下

二三

利休田中氏後
改_三氏名宗易
号_三松笠斎茶
道中興ノ祖

近江

月令孟春月
瀬祭魚

暴風

かゝるまゝのしほを解しよひまろ入
まゝしほをまゝるるふりこのしほ

菌_二子_一あゝるるふ十_二地_一とろりん

地よれく_二落_一し利休のく_二ま_一ま
りき_二落_一く_二と_一らゆる物き

川_二柳_一のま_二ろ_一あゝるる勢田のま

厚_二く_一の_二報_一し_二つ_一る_二月_一のま

中_二の_一ま_二ら_一ら_二る_一る_二瓦_一家

糸_二の_一ま_二ま_一よ_二ま_一い_二り_一ま_二ぬ_一る
徒_二り_一く_二え_一ま_二れ_一ハ_二花_一の_二ゆ_一ま

丈_二山_一ち_二月_一ま_二出_一れ_二る_一ま_二の_一月

春_二く_一く_二た_一ら_二ま_一ま_二く_一ひ_二ま_一あ_二く_一

田_二は_一ら_二り_一か_二る_一ま_二ま_一ま_二ま_一ま_二ま_一

る_二の_一ま_二ま_一ま_二ま_一ま_二ま_一ま_二ま_一ま_二ま_一

湖と背戸く_二風_一ま_二ま_一ま_二ま_一ま_二ま_一

ち_二の_一ま_二ま_一ま_二ま_一ま_二ま_一ま_二ま_一ま_二ま_一

石川文山隱居
洛東号_二六_一火_二
詩仙堂_二築_一

雞兒腸

竹葉韞

一針一草梵_二烟_一經
見_二ユ_一六_二僅_一カリ
物_二ノ_一人_二施_一与_二ス_一ラ
云_二テ_一針_二供_一養_二善_一云

臘ハ微物ニシテ
供スルヲ云ニヤ

鮭漢名松魚

御師御祈禱師

略東鑑壽永

三年晋武備御

祈願イテ奉寄

武藏國大河土

御厨所住伊勢

外宮住為年来

御祈師被禱權

祓且光親神素

氏玉鬘髮卷御師

ノ稱見テアリ傍

注云祈師ナリ

槍大平記住吉

合戦ノ条ナ楠正

行兵士内天野

了願上云法師武

者柄ノ長サ一丈

許ニ見エタル槍

ノ馬ノ半長ナリ

前ノ書昔槍ヲ

用タルヲ見ス

或云槍ハ楠正

成カ所造ナリ

ト云日本紀三代

實録ニ見エタル

槍ノ牙狀類ナ

故保古ト訓セリ

今槍ニ非ルニ

曹洞宗越前

永平寺ヲ本坐

曹山洞山ニ僧名

素襖源氏園屋

卷襖注ニ素系

襖ノ注ニ素系

ノケルモナリ大

双糸見エタル

キスアウハ是ナ

單ニ地文ナキカ

故ニ素ト云ナル

懸素襖ハ略ナ

袴ナク烏帽子

ナシ

計の依るは乃宵のちのめく
乾麩の目となるれともめさるり

初らうも兼七の鶴よ法符く
梶持あうく信平 是 尚く
糸葉

初志よ此師の猶文のあきま
鞠場乃土をたきく承きく日
葉

ちのとちあまなれハる百陣
楠ハ浮流を埋る湯次平
相る

多鷹さつひくおれ陰持
あや九て控蹴儀あま人たる也

秋のまきぬのぬきき
かろく 踏ふ 孝 市 乃 西 露

曹洞宗乃そのゆりやう
雇人のまあ後を肩あうちうけ

ねくま路のめくくま志める
さあらぬ葉乃一 院 平 乃 乃

舟乃始ひな木屏をほる
警装の舞の拂はる御儀とて

福神一説大黒
恵比須ヲ大貴
巳東代生二神
ナリス今烟画
スル大黒西上ノ
摩訶迦羅神

京東山

前見

大和藤原
持統天皇都

書紀背負
十箇之載ト
アリ後世胡録
藤羽壺ノ諸名
アリ

乃新のたぐむつくと居新
新のこころ結あむむ挑灯

ふきぬ風形よそくくとととと
一浦

後新の惚れつともたつくとと
浦根一をひよあつくととと
浦

別札のうけふと念の跡よとと
人ほく牛ととととととととと

ととととととととととととと
藤原あを思ひの和の山村あ

園うへの好む投持あや世の持あ
雷降をともむ作はととととと

ととととととととととととと
翻り書ととととととととと

ととととととととととととと
たてまよ作とととととととと

ととととととととととととと
ととととととととととととと

ととととととととととととと
病とととととととととととと

下

三十五

前見
串童

西近江

そよめぬお櫻をささねよこる
やうと利もるるらそよ秋の月
藤^{ユエ}茵^{ユエ}ゆくとけの河のをかき
照^{ユエ}穂^{ユエ}よふ年一志こる鳥よ
さううほもこく通る雛
葉^{ユエ}候の口もさあられぬ月
新の月も葉候のさのは桐とこ
あはれ降とく革^{ユエ}袴とく

壬子ヨリ癸亥ニ
至ル十二日ノ中
間日四日アリ
故ニ八專ト云

義経記等
金商^{ユエ}志^{ユエ}アリ
謡曲^{ユエ}三吉次兄弟
ト云^{ユエ}庄^{ユエ}吉^{ユエ}六^{ユエ}名
所見ナシ

山城

韃^{ユエ}神^{ユエ}三^{ユエ}系^{ユエ}宗^{ユエ}近
カ故事^{ユエ}ニヨリテ
鍛冶師^{ユエ}楠^{ユエ}荷^{ユエ}ヲ
祭^{ユエ}来^{ユエ}レリ

そよめぬお櫻をささねよこる
やうと利もるるらそよ秋の月
藤茵ゆくとけの河のをかき
照穂よふ年一志こる鳥よ
さううほもこく通る雛
葉候の口もさあられぬ月
新の月も葉候のさのは桐とこ
あはれ降とく革袴とく
そよめぬお櫻をささねよこる
やうと利もるるらそよ秋の月
藤茵ゆくとけの河のをかき
照穂よふ年一志こる鳥よ
さううほもこく通る雛
葉候の口もさあられぬ月
新の月も葉候のさのは桐とこ
あはれ降とく革袴とく

下

三六

丑寅ヨリ吹ヲテ
ラント云方言云
ニ云
後鳥羽院ノ時
榮西ノ来ニテ禪
法ヲ傳ヘ来ル
後鳥羽院ノ時
法然大易行道
ヲ勸メテ浄土宗
ヲ立ス

駿河

下

二六

な〜〜〜止〜〜蝉〜〜坂〜〜鳴
佛檀〜〜縁〜〜垣〜〜ハ〜〜浄土宗
湯ノ徳利〜〜と〜〜と〜〜叔彦
ち〜〜も〜〜管〜〜め〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
富士川ノと〜〜り〜〜る〜〜秋ノ風
を〜〜根〜〜葉〜〜あ〜〜ら〜〜ら〜〜き〜〜の〜〜ら〜〜ら〜〜ら
〜〜と〜〜何〜〜つ〜〜と〜〜と〜〜拂〜〜ひ〜〜さ〜〜く〜〜
〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と

逸史明皇夢ニ
終南山ノ老僧尺
八寸付ス上コレヲ
吹テ前ヨリ習ヘル
手ノ如ク云云尺八
此邦ニ傳ル所何
年間ト云コトヲ
不考

伊勢

國俗惣名琴去
今三三三也
河海抄命婦河
也子筑紫彦山
唐人筆曲ヲ授ク
色子是ヲ宇多
天皇ニ授キ奉ル
因テ筑紫琴ヲ
氏云

下

二七

小〜〜池〜〜匠〜〜若〜〜の〜〜丁〜〜狹〜〜と〜〜と〜〜也
津〜〜と〜〜松〜〜坂〜〜乃〜〜る〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら〜〜ら
〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と

西家時

丹波能勢
妙見

秋冬

陸奥

蘆

猫間地名家陸
御前内記見陸

御前地記見陸
御前内記見陸
御前内記見陸
御前内記見陸
御前内記見陸
御前内記見陸
御前内記見陸
御前内記見陸
御前内記見陸
御前内記見陸

前見

角黍屈原ヲ
甲ナル故事ニ始
リテ今王端午ニ
作ル習ハセナリ

昔もやめく旅勢をありしも
此處をわたりしつゝ六代ころ
流ちりりく遠に襟をき

落のく度きあふそそき理を
くあせりあをまきあぬる

そそきあせりあをまきあぬる
あはれあきくゆきとあひ

拵ぬく芦のあらくくと
そそきあせりあをまきあぬる

きりりくあせりあをまきあぬる
年の勝ともくく初沙

かきりりくあせりあをまきあぬる
川くもくあせりあをまきあぬる

あせりあをまきあぬる
女あせりあをまきあぬる

押うげあせりあをまきあぬる
旅月あせりあをまきあぬる

あせり

下

三

前見
穆子

大和

前見

とよき月夜に於たりては
かろくは先達をなす秋の山

秋の月夜に於たりては
穆子もあはれは秋の山

くわしよのさるればよき月夜に於たりては
大和人もあはれは秋の山

とよき月夜に於たりては
前見もあはれは秋の山

數珠念珠テ
數ヲトル故ニ
スハト呼来リ

前見

近江

宗たるのきれよふいぬ珠を
茶漬をさるるは秋の山

とよき月夜に於たりては
移の葉もあはれは秋の山

つゆとくは切馬の若くあては
秋の山もあはれは秋の山

近江の山もあはれは秋の山
二百の葉もあはれは秋の山
あはれは秋の山

下

三十一

撰集抄壽永
年中西行讚
州善通寺ニ
アリテ作レリ

神風神武紀

ノ歌ニ初テ見ユ

伊勢ノ枕詞ト

ス伊勢ノ風氣

温厚ニテ

尊神ノ鎮リ

座ニキテ前古

コト懸議スルト

コロナリ

右京亮藤原

保輔女兒ヲ登

強盜ノ張本ト

袴無異ヤリ

前見

寛平法皇御

室ヲ仁和寺ニ

構サセ給言リ

門跡門主稱

号起レリ

編笠ノ名太平記

十卷相模太郎

破名草鞋ニ編

笠着テナリ

雞冠花

撰集抄ニ 續ト 巻ノ人

鼓粉の中ニ 踊ル 杓杞の芽

樽の筈ニ 月心なきを 札ちりて

もよほさし 又さひさのきりり

住こもこも ともと 糸 花

紺屋をさし ころもころも 小丁種

嫁ころもころも ねいさあきりりめい

川ノ秋を ねのりらの 袴さし

小笠上る みるを 紙らさ

尾の日記 人をも おか

そま 鞋をさあけ ともいぬえの 妻

西門至の 葉もとの 入るぬもあ

いのち 接し 逆る 小 ^{カサリ} 樹

るの 陣日 ハリせぬ あうら

めあがり ともあを 左の人と 海

秋ノ ありとも あり 笠をさし

鷲臥の ありとも あり 袴のさし

林曹

曹

下

弥勒此慈氏
上云補処ノ其
トノ兜率天ニ
アリ

法華八講
法華要文ヲ
問講師逐一
答述ス一且座
之講ノ故名
陀羅尼惣持
ト翻ス一切眞言
ヲ云

鴟

雜遊源氏枕草
紙等ニ見ニ雜ハ
謂ル人勝ナリ
源氏須磨ノ
御夜ニ形衆
モテ流ハ一見
名ハ已ニ雜遊
モト贖物充ヘシ
孝徳紀天化
年間新羅獻
孔雀鸚鵡各一
隻是ヨリソ吾邦
此禽多クナリ
踊孟蘭盆經ニ
七月十五日ヲ歡
喜自恣トスルニ
ヨリテ歡喜踊
躍ノ態ヲスルヲ
ナリ

新の音をききしつゝは 浮動を
驚かすまてめを 歎きこく

ゆるんこまのりまのる中興
ハ後傳の隆にほたるも 白くあり

ゆゑのぬけはくその腹干あく
ゆる子のまをいひぬ 古尼

あまのちあきすまのこまのり
まをまのまをいひぬ 野のり

こまのこまのり 掃蕪一まのり
新のつゝまのり 一のぬ

新の仕舞のり 新のりある
新のりあるとあくありまのり

第月のり 月新のり
新のり 乃 産 くら

新のりある 新のりある
新のりあるとあくありまのり

新のりある 新のりある
新のりあるとあくありまのり

新のりある 新のりある
新のりあるとあくありまのり

新のりある 新のりある
新のりあるとあくありまのり

下

下

道祖神佐倍乃
加美書紀ニ謂
正岐神コレニ
當レ方

旦東方見ル
太白ト云昏西方
ニ見ルヲ長庚
ト云

佛瑞應經云

四月八日夜明星
出時生即周

莊王十年四月
辛亥也ト法苑

珠林見エタリ

律三云佛聽蕃

柱杖蓋行李之
善助ナリ

江戸

奥儀抄ニ鳩吹
トハ何意ノ答曰
獵師人ニ鹿アリト
知ラセテト思フニ
手ヲ合セテフ多
鳩吹ト云ナリ

あきあきへまのりうへるをねん
る月　そくそ　大白乃　野

月　そくそ　と　佛　生　海

餅のあき　仔細うら上ハさう　と

あきあき　と　掬　あ　と　さ　る　海　の　水

滑　と　さ　の　と　さ　と　瓜　う　め　り　つ　と

あきあき　と　あ　き　あ　き　強　く　枯　あ　ー

あ　角　と　り　れ　と　と　枝　は　は　い　と　り

あ　き　あ　き　の　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き

あ　き　あ　き　の　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き

あ　き　あ　き　の　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き

あ　き　あ　き　の　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き

あ　き　あ　き　の　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き

あ　き　あ　き　の　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き

あ　き　あ　き　の　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き　あ　き

下

三三三

陶尾張守晴
賢大内美隆ノ
臣謀殺シテ押領
周防長門核新
元就ニ亡サレ

播磨

羅漢松

上野赤城
會目運母獄苦ヲ
終タテ孟蘭盆

権理丸を入手するは
多しと云ふ陶の一巻もたひり
昔も灰のさつとさつさるるの巻
あひもよらぬ指丸一編
うほくくと下り果もる
名々の地利を推く又也
日七巻くく巻のちくく巻の何
番と指佛と推くくく指り
とさつとさつとさつとさつとさつと
小使くくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくくくく
あれをさげ板舟のわらわの巻
はくくくくくくくくくくくく
二巻をさつとさつとさつとさつと
かくくくくくくくくくくくく
ゆわをさつとさつとさつとさつと

下

三十一

會々談々西蘭興
秋園懸上云金貯
食淨器有諸國
中元節過後行
多流行益去
美濃

三河

遠江秋葉權
現社祭神倉
貴命

西方弥陀國
土土故三顧生
徒公皆西席ノ
想ヲナスナリ

竹譜日竹次
月為春

時りきききき 柳の生るる

杉舟の如北 雲の志月より
吹くく 野千 柳さく後まき

とろくくと 長波の流 菊の人多り
湯の香くくく 葉 笑けり

ふみのさき 乃 汐をきききききき
とのさき 乃 汐をきききききき
引ちかききき 葉 乃 書ききき
秋風や安くききき 秋風や安く

あかき 乃 汐をきききききき
さかき 乃 汐をきききききき

あかき 乃 汐をきききききき
さかき 乃 汐をきききききき

あかき 乃 汐をきききききき
さかき 乃 汐をきききききき

あかき 乃 汐をきききききき
さかき 乃 汐をきききききき

ト

三河

前見

擧

從我國古臣

木上書テヲミト

訓ス後モミト

レリ

卓惟

前見

新田左義備佐

義興六卿山上

矢口渡舟中ヲ

自叙ス其靈

崇ヲナス

近江

照姫八相州權

現堂上云宿ノ

遊女リ小栗

満重男少次郎

夕危難ヲ救ヒ

シテ大草紙ニ

見テテ異本

照手姫在リ

照姫八相州權
現堂上云宿ノ
遊女リ小栗
満重男少次郎
夕危難ヲ救ヒ
シテ大草紙ニ
見テテ異本
照手姫在リ

少社の流よされしはのうへ
樹あらしを推る 根乃才
りよあへ多難とてあき月の根
柳あもを 陰をつけき 客さし
お姿の 産 糸あつて 秋の風

あきぬあきぬとあふまはつて
世の定村よ 誠 美しきあはる
すりあふ かしき 十乃を
あらしき 思ひの 新にわらふ
あしき 新にわらふ 新にわらふ
あしき 新にわらふ 新にわらふ

あしき 新にわらふ 新にわらふ
あしき 新にわらふ 新にわらふ
あしき 新にわらふ 新にわらふ
あしき 新にわらふ 新にわらふ
あしき 新にわらふ 新にわらふ
あしき 新にわらふ 新にわらふ
あしき 新にわらふ 新にわらふ
あしき 新にわらふ 新にわらふ
あしき 新にわらふ 新にわらふ
あしき 新にわらふ 新にわらふ

下

三五五

觀世音普門
呂法花ノ流
通分ナリ

今井田郎兼平
ハ我仲忠臣松
栗津田畔アリ

ゆうゆうも普門品よ
のうも二階一も満
たひく時め入つる
若ふのねも物を引
そ無あつたよそ
にあもささるる
あわくさまのつ
あまも山も
あまも

三十一

時

雪隠雪隠買
故事ヨリト多
ク云説三則也
青椿ヲ我其
杳穢ヲ去雪
隠ト書ハ音ノ
傳セナリト云

前見

雪隠 約七降中
年一う種さか
結深る地ある
狐の音人 跡
唄の松され
ぬくりくと松
起ゆよあ
解

ト

前見

赤鷲の乃佛くさくさよ
出笑くもさくさくさくさく

行厨

赤高の輝きもさくさく物作り
らんねくもさく風鈴のさく
川雲のやうなれはなぬさく
雲の雌雄く今かきく
山

鳩 鳩
前見

かきまぬ事免のくさくさくさく
かきみね本陣の大さく
くさくさくさくさくさくさく

山城

おく川よさくさくさくさく

とらへ向くさくさくさく
さくさくさくさくさくさく

滝く岸下のさくさくさくさく
界さくさくさくさくさく

堀利を捨くさくさくさくさく
牛鬘くさくさくさくさく

あり今を中さくさくさくさく

夏夜百合
香ヲ聞ノ意
アリ

下

漢例 ぎ〜 杉や栲や

百うまらう山ゆりうり入る 和

岩角よ佐物 均しく逆仰り

き〜き〜き〜 瘡 忘るる 一

漆〜さよ 櫛の輸入と叫ぶ

前見

ひ〜き〜ふ〜き〜く 移るのうとほく

きと入る〜と なる 乃 三

昨〜き〜き〜したハふきとせよ

田青橙

信濃

か〜りとま〜く 川〜本ある

る ち〜き〜き〜き〜 移る とき 並

あ〜あ〜よとのりと 塙のサガれ

ち 神 ち〜き〜き〜 宇治の百姓

山城

眼の〜あ〜き〜 ち〜き〜 ^{ヤシチ} ち〜き〜 並

つ〜う〜ひの おま〜ハのり 七 料理人

き〜き〜あ〜き〜き〜 牛よつと〜き〜あり

瘡 ち〜き〜き〜き〜 帯 ち〜き〜き〜 相る

漢名未詳

下

三十八

江戸

山城字治
黄檗山八掃
朝僧隱齋
奇ヲ開トス

常陸

西住西行大
弟字在家ノ時
ヨリノ給仕セリ

前見

伊豆

覆膊

金銀のあれやとてしある福清うを
少重の海よ、娘乃、新り切

新くくよ上野をえも、まをひ
新よ金をく千一、共をむ、ふ、仙

新よくくくく、ま、染の、子
髪をを、一、板、く、新、く、

生くく、の、新、く、ま、く、ま、く、く、く、
新、く、く、く、く、く、く、く、く、

狸、く、く、く、く、く、く、く、く、
西、く、く、く、く、く、く、く、く、

中、く、く、く、く、く、く、く、く、
新、く、く、く、く、く、く、く、く、

く、く、く、く、く、く、く、く、
小、く、く、く、く、く、く、く、く、

福、く、く、く、く、く、く、く、く、
を、く、く、く、く、く、く、く、く、

莊子養生主
庖丁爲文惠
君解牛庖丁
名此始

甲斐

前見

庖丁の解牛するの妙を説く
そのうち庖丁と文惠の十月
月夜のうけふうのうけふう
後掲のうけふうたるむとや
は通なり去年の月もたつら
あつかううのうけふうと
此のうけふうのうけふう
其のうけふうのうけふう

賽本名學

丁香

イシノリトクニ
冶工石凝花命
ヲ祖トス

ふかしのうけふうのうけふう
梅を折るとさうらり
ふかしのうけふうのうけふう
ふかしのうけふうのうけふう
院内の月もさうらり
ふかしのうけふうのうけふう
ちんくくと解法の妙を説く
たひくると解法の妙を説く

仁德紀四十年
依綱阿彌古補
異鳥五首酒子
酒君向之對日
許呼俱知未幾
時而符馴酒君
居脫上補之即
今時舊也

補陀落山八南
天竺ニアリ觀音
垂跡之地熊野
那智山ニ在リ云
ナリ

月おろし田原の夢をたたりあけ
ささくわー 雲み秋のあけ

まろくぬ木の雪の跡ね 幸甚
夢をささくわー 雲み秋のあけ

その殿 雲み海をささくわー 雲み
流くあけハ 跡ね 流く海

補陀海や風をささくわー 雲み
都をささくわー 雲みの葉を

嘆をささくわー 雲みの葉を
葉をささくわー 雲みの葉を

梅室大人附句 校萃下巻 終

風月不遊ふしとて友小志うは友にのちをみる小
志かれ山水の幽遠静るに蹤放或ハ蕭々城
入るこも〜 蟬妍紅團小遊ふ〜と〜とあるひ
海にありて〜とあるひハ醉たあるひハ
順りあるひハ喜らあるひハ喜りあるひハ喜

あはれをわづらふ〜と〜とあるひハ
は〜と〜と 廿梅堂夫人連歌乃詞を〜と
物南に菊所子〜と〜とあるひハ
と〜とあるひハ 杖山な〜とあるひハ
と〜とあるひハ 人達にふせあるひハ

たああさうしてれちまん人しんおんん
れれれりあまの

はるけり春金平の言信陽史母南書行年記

あまの書聲記轉



金花堂藏板目錄

日本橋南通四町目

須原屋佐助

源氏忍草 五冊

成島公序

世書源氏物語一巻の大意状を記す
しるす小冊をうたむるはとくあり源氏を
あはれまふ人の必すまふべき味ひは
なまあり

萬葉摘落義 五冊 正木十幹大人輯

世書源氏物語一巻の大意状を記す
しるす小冊をうたむるはとくあり源氏を
あはれまふ人の必すまふべき味ひは
なまあり
一の巻 天竺の部 二の巻 世儀の部

三の巻 神代卷 紀元人倫圖 神代卷の部
四の巻 賦古卷 賦古の巻 歌歌卷 歌歌の部
五の巻 歌古卷 歌古の巻 歌古の部
六の巻 歌古卷 歌古の巻 歌古の部

千鳥之跡

中臣親滿大人著

此書は神代卷 紀元人倫圖 神代卷の部
四の巻 賦古卷 賦古の巻 歌歌卷 歌歌の部
五の巻 歌古卷 歌古の巻 歌古の部
六の巻 歌古卷 歌古の巻 歌古の部

古今之選

本居先生輯

村田並樹大人校

此書は神代卷 紀元人倫圖 神代卷の部
四の巻 賦古卷 賦古の巻 歌歌卷 歌歌の部
五の巻 歌古卷 歌古の巻 歌古の部
六の巻 歌古卷 歌古の巻 歌古の部

類題和歌補潮

六冊

加藤古風大人撰

この書は神代卷 紀元人倫圖 神代卷の部
四の巻 賦古卷 賦古の巻 歌歌卷 歌歌の部
五の巻 歌古卷 歌古の巻 歌古の部
六の巻 歌古卷 歌古の巻 歌古の部

唐物語

一冊

西行上人作
清水濱臣大人標注

この書は神代卷 紀元人倫圖 神代卷の部
四の巻 賦古卷 賦古の巻 歌歌卷 歌歌の部
五の巻 歌古卷 歌古の巻 歌古の部
六の巻 歌古卷 歌古の巻 歌古の部

撰和歌集

假字假名

一冊

大野廣城先生輯

此書假字假名多し、是れは、
此書假字假名多し、
此書假字假名多し、
此書假字假名多し、

古今和歌集新校正 二冊

賀茂公羽考正

鈴屋公翁再訂

是れは、古今和歌集の古本あり

撰和歌集 二冊

古今和歌集、もろに撰和歌集の撰和歌集、大冊の、
撰和歌集、もろに撰和歌集の撰和歌集、大冊の、

元和帝御撰

集外歌仙

一冊

一名近代歌仙

是れは、中世の、
是れは、中世の、

正後假名遣 一冊

賀茂季鷹縣主輯

此書の流傳事紀日本紀事類考集和名抄の類と
つとく類の傳事といふは所々引出さるる使事
しむ

源氏百人一首一冊

黒澤翁滿大人著

此書の流傳事紀日本紀事類考集和名抄の類と
つとく類の傳事といふは所々引出さるる使事
しむ

ら流傳事類考

小本線色摺一冊

源氏流傳事類考の類と
つとく類の傳事といふは所々引出さるる使事
しむ

芭芭蕉の句山鏡一冊

雪中庵菴太翁述
門人 二駱 者

此書の流傳事紀日本紀事類考集和名抄の類と
つとく類の傳事といふは所々引出さるる使事
しむ

古今五百題遺句集 二冊

黒瀬曾見翁校輯

此書の流傳事紀日本紀事類考集和名抄の類と
つとく類の傳事といふは所々引出さるる使事
しむ

字と所々人々人々

俳諧年表録 一冊

咫尺齋豊山公羽著

此書は貞徳世の俳諧家の人名をとりあつてその名前の生因を述べたものなり

俳諧人名録 二冊

東都惟草芥先生輯

此書は中世の俳諧家の人名をとりあつてその名前の下ふ其の生因を述べたものなり

俳諧發句題案 一冊

椿丘太郎公羽輯

此書は和歌題林抄ふあつて近代の作家二十

七千二人の姓名とあつて其の生因を述べたものなり

俳諧發句題案

初編 一冊 一名口調龜鑑

此書は和歌題林抄の撰ひたつて其の生因を述べたものなり

俳諧合鏡

懷中 一冊

拙堂芦丸翁撰

此書は和歌題林抄の撰ひたつて其の生因を述べたものなり

本草の如くもれは法よりけり然れどもその如くもれは
利ありて世に世に教養の爲にせらるるなり

金生樹譜

三冊

長生舎主人編

此書は草木の神性の地土の性質の如くの中を接木の
法にて中を中を中を中を中を中を中を中を中を中を中を
國の志本と圖に中を中を中を中を中を中を中を中を中を
中を中を中を中を中を中を中を中を中を中を中を中を中を

松葉蘭譜 一冊

此書は松葉蘭の神性の地土の性質の如くの中を接木の
法にて中を中を中を中を中を中を中を中を中を中を中を
中を中を中を中を中を中を中を中を中を中を中を中を中を

海人

幼雅画本 一冊

柳烟堂主人筆

此の書も幼雅の如くもれは法よりけり然れどもその如くもれは
利ありて世に世に教養の爲にせらるるなり

古今名馬圖彙

繪本金剛傳

繪本勇士鑑

繪本武者拵

早引二體節用集大成

繪事三圖妖婦傳

上編 五冊
中編 五冊
下編 五冊

合十五冊

此書は高蘭の文人の校訂あり世に知られるもの
多し其の書の繪中より
其の書あり

抱一先生画譜一冊

彩色入善本

彫物画系

名家画譜 二冊

魚鱗手引種

繪本百物類

梅室家集 二冊

梅室先生自撰の集あり

梅室文人改句梅室家 二冊

勢南菊所 編輯あり

系書集御膳書系 五冊

双雀庵系書翁の家集也

日光山誌 五冊

植田孟縉編

更科日記 二冊

武家用文章 一冊

武家の文章の用向は、戦国時代から江戸時代にかけて、
細く長く、各書格にわたる。武家の文章の用向は、
戦国時代から江戸時代にかけて、細く長く、各書格にわたる。
武家の文章の用向は、戦国時代から江戸時代にかけて、
細く長く、各書格にわたる。

截體半多 横一冊 女中必用

この書は、江戸時代から明治時代にかけて、
武家の文章の用向は、戦国時代から江戸時代にかけて、
細く長く、各書格にわたる。武家の文章の用向は、
戦国時代から江戸時代にかけて、細く長く、各書格にわたる。
武家の文章の用向は、戦国時代から江戸時代にかけて、
細く長く、各書格にわたる。

截りの文章の用向は、戦国時代から江戸時代にかけて、
細く長く、各書格にわたる。武家の文章の用向は、
戦国時代から江戸時代にかけて、細く長く、各書格にわたる。
武家の文章の用向は、戦国時代から江戸時代にかけて、
細く長く、各書格にわたる。

蘭書法秘傳抄 一冊

蘭書の文章の用向は、戦国時代から江戸時代にかけて、
細く長く、各書格にわたる。武家の文章の用向は、
戦国時代から江戸時代にかけて、細く長く、各書格にわたる。
武家の文章の用向は、戦国時代から江戸時代にかけて、
細く長く、各書格にわたる。

古今名物類聚 全十八冊 不昧公著

古今名物の文章の用向は、戦国時代から江戸時代にかけて、
細く長く、各書格にわたる。武家の文章の用向は、
戦国時代から江戸時代にかけて、細く長く、各書格にわたる。
武家の文章の用向は、戦国時代から江戸時代にかけて、
細く長く、各書格にわたる。

廣益諸家人名録 一冊

詩佛 五山 兩先生序

此書は諸家の傳記を以て編纂し、其の體裁は家系圖に準じ、其の筆墨は詩佛の風格あり。五山の先生序あり。其の體裁は家系圖に準じ、其の筆墨は詩佛の風格あり。

富士根元記 一冊

鈴木頂行先生校

此の書は富士根元を以て撰述し、其の體裁は傳記に準じ、其の筆墨は鈴木頂行先生の風格あり。其の體裁は傳記に準じ、其の筆墨は鈴木頂行先生の風格あり。

甲冑圖式 一冊

同 著

此書は武林法量二編に引く甲冑圖ヲビラカニス

弓箭圖式 一冊

同 著

此書は先生著ハス如ク武林法量中弓箭ノ一節
タリ武家方カナテ見玉フヘキ書ナリ

單騎要略 五冊

村井昌弘先生編輯

此書ハ甲冑ノ着用故實禪觀衣等自ヤウ頭盔ノ
緒ノシメヤウ背旗ノサシヤウ等マデオクク圖ヲ設ケテ詳

一サトシ手ニ携ルル外ノ鎗刀器械ニ至ルマテ其故實ヲ明カニ
シ一騎前ノ要領ヲ盡セリ武家方ハサテ子リ有職ノ學子シ
玉フ人ハ必坐右ニ置ベキノ書ナリ村井先生ハ神武迪精武
學先入等ノ作者ニシテ其名高シ

掌中古刀銘鑿一冊 巨櫛園輯

此書ハ先ニ銘盡數多シトイヘ凡其事替リ當同前
專兩作一傳ノ次第珍數作人其外吉野年号打作人又
文中心鑄廣狹帽子固條鼎煮鋸取造リ様子梵字
并彫物ノ次第鑿定會ノ入札卷ヘヨリ致シ鍛冶ノ官名作
人位列鍛冶ノ系圖并名寄等ニ至ルマテ委シク辨シ難キハ
圖ヲ出シ疑數事ハ載ス奇大ノ珍書ナリ

校正 古今 鍛冶銘早見出

尾関水富大人撰

寸珠 上下合本二冊

此書ハ大宝中ノ天國ヲ始トシテ今ノ世ニ至ルマテ千百餘年
ノ間鍛冶ノ銘ヲ輯録シ殆一万三百六十餘工ニイタル
古カ七十六百十餘如此多銘ヲ集シハ末世ニナキ所也シカ
新カ二十六百十餘ナラズ見出ニ速ナラシガタノ銘ノ頭字ヲハ分ニナシ
長銘二字銘ハサラナリ年号彫リシホドノモノハ其年号
ヲ顯シ年号ナキモノハ其時代ヲ考ヘ年紀ヲ施シ父子
兄弟子弟ヲ亂シ且梵字ハ治エノ信心ノ取スル処ナリ是等
ヲ顯シ亦甲申ハ我身ヲ護ル第一ノ要具ナレハ卷末ニ妙珠
家早乙女家等ノ家系并ニ鑑定ノ次第ヲ附録ス御武
家方ハ云モサラナリ武器高ノ家々モ片時モ坐右ヲナサ
レザル珍寶ノ書ナリ

古刀

目利早手引

同撰

両面摺

此書ハ又紋ノ控又ハ時價或ハ切レ物并様々ナド頭シ初学ノ便リニ上ナキ珍書ナリ

古刀

相撲取組

同撰

同

古今

正真便覽

同撰

折本

此書ハ古刀新刀ヲ銘忠釘ハ云ニ及ス又紋鈍ニ至ルマデ正真ノ作ヲ写シシモノナレバ此図ヲ見覺時ハ正作ヲ見テ立所ニ夫レノ作ト知ルノ面深ノ人ニ逢ガゴトシ又カ斂圓形ヨリ出ルヲ図ヲ以頭シ且疵ノ用捨或ハ目利會ノシヤウ又ハ當同前并ニ点ノシヤウヲモ附録シ亦斂尺ヲモ録シテ懐中ノ重宝トス
實無双ノ珍書ナリ

明季遺聞

四冊

清鄒錫山先生著

此書ハ清ノ鄒錫山手輯ニシテ明末季自賊亂ヲ倡ヘ本末ヨリ清ノ開闢ヲ平定スル事ニイタル國性爺事實等ノ書ニ詳ナリ

歷代帝王承統譜

折本紀藩春川先生校閱

此書ハ唐虞以來清道光帝ニ至ルマデ漢土歷代承統ノ主ヲ系譜ニ作リテ歴史ヲヨムモノニ便リス

草聖彙辨

八冊

清朱迦陵先生摹辨

漢土ニテ歷代草法ヲ集メタル書數多アルガ中ニ此編精

皇國永根文峯先生校字

善ナルニ如ハナシ我朝兼明親王ノ書ヲモ以編ニ才ヲ出セリ
始メニ二畫ヨリ二十畫ニ至ルヲ檢字アリ以テヨリテ字ヲ察ム
ベシ第八卷ニ草法母觀ヲ附シテ草書ヲ學ビ玉フ君子珍
セズンハアルベカラザル書ナリ

草書前赤壁賦 一冊 天民先生書

此書前赤壁賦詩佛先生ノ書ニタリナリ筆法一家ノ風ニ
激テス勵セス手本トスベキ書ナリ

小學題辭 一冊 龍澤先生書

此書宋朱文公ノ小學題辭龍澤先生ノ書ニタリ筆
力怒張唐人ノ風アリ

草書千字文 一冊

屋代先生書

此書六帖池屋代先生ノ筆法ヲ見ルベキ刻本ナリ

玄對先生西譜 三冊

玄對翁筆

此書ハ人物花鳥ノ類ヲ玄對先生ノ西譜ノ人ノ手本トカレ
タリトリソノ奇絶ナルヲ本書ヲ開キテ見玉フベシ

西音發微 二冊

柳圃先生遺教
大觀玄幹先生著

此書和蘭書翻譯ノ時西洋語ニヤタル和音唐音ヲ
撰ビ對註ノ仕様ヲ詳ニサトモ西洋字原考ヲ附シタリ

武器袖鏡 一冊

栗原先生著

此書ハヨク武器ヲ因式ニテハミテ且附言ニ女子ノ事ニ付精キ

武器袖鏡後編 一冊

同 著

此書甲半首喉輪ヨリ馬具旗指物等ニ至リス子武器ノ圖式ナリ

武器袖鏡三編 一冊

同 著

此書ハ現在スル古甲冑五十二種ノ威色ヲ彩色圖ニテアソシ甲冑製作便ナラシム

皇和魚譜 二卷

栗本先生纂

此書二六河魚類凡五十一種ノ因説ヲアゲ卷二六河海通在ノ魚類二十三種ノ圖説ヲアゲラレタリ海魚ノ類ハ逆刻ニ出ス魚類ノ性味ノ良毒ノ辨シガタク混シヤスキモノ此書ヲヨシタマハハ分明ナルベシ

為己執記 一冊

羽佐間芝敷先生著

此書ハ醫道ノ公人ノ為ニスルワサト心得ス己ガ為ニスル仁道也ト心懸ルガ肝要タルヲヲ辨シタル書ナリ

老婆心書 二冊

同 先生口訣

此書ハ婦人妊娠ヨリ小兒出生無病ニ成長セシムル手當

温涼調理飲食好惡宜忌等平假字ニ書ニテ心得
ヤスカラシム

張氏醫

九七冊

明張路玉著編

言志録

一冊

佐藤一齋先生著

近代名家画帖

三帖

近葉菅根集

全五冊

中河通也流俗信然弊冲の書想より殊在るをいふ、其
際在り人の書體も、家集ある人の家集なりれりある人を
をも、或は流俗の流俗を、或は實子と人の書體をいふ
なり、その書體も、いふに、その書體も、いふに、その書體も、

江鏡中ノ心

全貳冊

此書を是の心、いふに、その書體も、いふに、その書體も、いふに、その書體も、いふに、その書體も、いふに、その書體も、いふに、その書體も、いふに、その書體も、

俗社

子集

草

全貳冊

野松若話

常盤澤水著 全貳冊

此書は多し若居父子支那の礼法より、其書のの熟習を、いふに、その書體も、いふに、その書體も、いふに、その書體も、いふに、その書體も、

子書此今生法海用書
以終
生切名代
子代のよめん

和堂先生書

六句帖

氣齋帖

屋代先生書

妙書子字文

猿山先生書

雁列佳本

昇阿阿雲紫後年 年內巨塔
加書此間爲後年 骨何波様柱
し古書和歌六帖徳柱 六舟
此書は家集集書史人集後撰集
不物て書より歌学にのりうら
批下すそむの色後書おそく
者ある所ありされはそむかえん
りさゆは條ゆのな後多し
書より柱國のゆり 昇阿
阿雲紫和歌の生い園前本人の
柱に標後年をえんして山のゆ
先生も柱柱をえんかして後書
書一のゆをあり書中不物を
りりりり九手五帖集のゆり
るるるる六野あり書二帖集の
来家の部分二帖三帖の地條の
部分に貼、巻紙方雜傳書又貼に
多龍巻あり書六帖、昇山書
巻紙都て歌のゆり、さむさむ
ゆり集書佳本なるゆりとのゆり
ありゆりに世のゆりをゆり
書中のゆり書はゆりゆりゆり

